

## 玖島神楽団

### ④ くじまかぐらだん

昭和53(1978)年に有志数名で発足。当時は衣装も道具もなく、まったくのゼロからのスタートだったが、地域の方々の支援もあり、今に至る。安芸高田市高宮の原田神楽団に指導を受け、阿須那(あすな)系八調子の新舞、旧舞を舞っている。今年で結成34年になり、高校生、社会人の若い団員も加わり、20人で活動。イベントや神社の奉納、各施設の訪問などボランティアも含め、多い年は年間20回以上の上演を行っている。

## 栗栖神楽団

### ⑤ くりすかぐらだん

昭和32(1957)年、栗栖地区の若者が郷土の発展のため栗栖神楽団を発足させた。矢上系山県舞を学び、現在に至る。団員は20人で、氏神である栗栖の河内神社の秋祭りを中心に、競演大会にも多数参加。世帯数の少ない栗栖地区だが、地域の方のあたたかい支援を受けながら活動中。後継者の育成、また地域発展のため、平成19年に子ども神楽団を発足し、活動の範囲を広げている。

## 津田神楽団

### ⑥ つたかぐらだん

文化3(1806)年に書かれた神楽舞「天臺(てんだい)將軍」の言い立てが神社に保存され、また天保7(1836)年10月9日夜、花上黄幡(はながみおづばん)神社で神楽執行などと記述された文書が残されている。明治の末ごろまでは夏から秋にかけて盛大に舞われていたが、その後衰退、復興を繰り返し、昭和52(1977)年以降、現在に至る。石見神楽矢上系に属し、津田八幡神社を氏神として、団員14人で活動。

## 原亥の子舞子連中

### ⑦ はらいのこまいこれんちゅう

亥の子祭の起源については定かではないが、古事などから慶長年間だと言いつづられている。もともとは伊勢神社で舞う神楽を子ども用にやさしくして各町内会に下ろしたもので、五穀豊穡に感謝する十二神祇の古式舞。戦後、少子化などの影響で森宗地区だけが残り、平成元(1989)年に地区の枠を取り、現在に至る。理解は難しいが、口上などは昔ながらの言葉を使い、歴史を知ることには大事だと活動中。団員は現在14人。

## 吉和神楽団

### ⑧ よしわかぐらだん

吉和地域で古くから伝わっていた神楽。地域に根差した文化の継承を願って、地域の有志や若者たちが集まり、昭和54(1979)年に神楽団を復活させた。十二神祇系の旧舞を主としていたが、最近では新舞も取り入れ、各共演大会や、奉納神楽など、活発な活動を続けている。また、子ども神楽団を平成11(1999)年に発足。吉和神楽団員の指導により伝統芸能の継承を続けている。団員は大人27人、子ども15人。



各神楽団の練習風景。写真上\_栗栖子ども神楽団。写真中\_津田神楽団。写真下\_吉和神楽団。

# 舞の系譜

神楽が、現在もその地で受け継がれているのは、それを伝えてきた継承者がいるから。このまちで活動する8つの神楽団を紹介いたします。

## 浅原神楽団

### ① あさばらかぐらだん

団の結成は、明治6(1873)年ごろと言われる。当時、亀山神社に奉納されていた「神輿(みこし)」の彩色修理のため、旧宮内村明石に住む人が伝授したのが発端とされている。以後代々受け継がれてきたが、継承者不足のため昭和47(1972)年に子どもたちに伝授し、「浅原子ども神楽団」として継続。その後、現在の浅原神楽団として活動。団員は現在16人。現在は十二神祇舞(じんぎまい)に加え、六調子系・八調子系の神楽を取り入れている。

## 伊勢神社神楽団

### ② いせじんじゃかぐらだん

文政2(1819)年に記された佐伯郡原村の「書出帳」に記され、古い歴史を持つ神楽。団員は現在32人で、氏神である原の伊勢神社の秋祭りを中心に舞う。特徴的なものに、全国でも珍しい「將軍舞」がある。「天臺(てんだい)將軍」と呼ばれるその舞は、鎧姿の將軍が弓の端で天蓋の五つの袋の米を落とし、激しく舞う。最後に弓を放ち、その瞬間に神がかりの状態になる「死入(しにいり)」や「死舞(しにまい)」と呼ばれる珍しい舞である。

## 河津原神楽団

### ③ かづはらかぐらだん

河津原では、明治10(1873)年ごろには、神楽の奉納が行われていたと言われ、130年に渡って受け継がれる。元来は「十二神祇」と呼ばれる神祇舞で、氏神である河津原八幡神社への奉納神楽で、幣(へい)や幡、扇などによる払い清めを基調に、舞の美を見せるものだったが、近年では「十二神祇」を伝統と歴史ある舞として保存・継承するとともに、高田舞や石見神楽を取り入れ、独自の新しい舞の創造にも取り組む。団員は現在15人。

## 廿日市市内の神楽団



※50音順で紹介しています



かつらぎさん「葛城山」—浅原神楽団—

大和の国の葛城山に棲み、天下を乱そうとする土蜘蛛(つちぐも)。主人公の源頼光(みなもとのらいこう)が病のときに襲いかかる。妖術を駆使するが、最後は四天王に倒される。

神楽。それは、遠い遠い昔から、数え切れないほどの人が、大切に、人から人へと伝えてきたもの。そこには、人々が生きた証がある。今、継承している人々が、その姿を舞うことで、命が吹き込まれ、時代の語り部となる。このまちで神楽に生きる人を追った。

# 神楽

かぐら

# 特集 紡いでいく—

神楽 そのとき、人は鬼になり、姫になり、神になる

—特集 15ページまで—